
竜を狩る物語

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜を狩る物語

【Nコード】

N8649Y

【作者名】

紅月

【あらすじ】

二〇二〇年。地上は謎の花に覆われ、竜が大地を支配するようになった。これは竜に立ち向かう『ムラクモ』という組織に所属する少年少女の物語。※この物語は二〇一一年一月二三日にセガから発売されたゲーム『セブンスドラゴン2020』の二次創作になります。ネタバレあり。それを了承したうえで読んでください。

1（前書き）

本作品を読みに来てくださりまことにありがとうございます。

この作品の一話目を読む前の注意事項として一話分を使うことにしました。

できればこの注意事項を読んでから本編へお進みください。

※この作品は二次作品になります。

あらすじにも書きましたが、この作品は二〇一一年一月二三日にセガから発売されたゲーム『セブンスドラゴン2020』の二次創作になります。

※原作通り進むのでネタバレ要素を多分に含むと思われます。

ストーリーの核心部分をぼやかしたりせず書く予定でいます。更新速度は遅め（最速で週に一回）にしていくつもりなので、自分がストーリー核心部分の話を掲載するときにはすでに大多数の人がクリアしているころだと思えます。それでもネタバレ要素を含むことを明言しておきます。

※原作中のキャラと言葉遣いが違うなど、原作と違う部分も存在します。

原作に忠実に進むつもりであっても二次創作ですので作者の妄想を盛り込みますので原作と違う部分も出てくると思います。それが許せるという人のみ読んでください。

※何かあったら即消します。

運営などから万が一警告を受けた場合はこの作品は削除します。その際は事前に小説を介して連絡するつもりでいますが。

その他、見切り発車である。ストーリー全体をつかんでいるわけではないので矛盾が生じる可能性など多々問題点は存在していると思います。もしも読者の方で、これはきちんと書いておいた方がいいというものがありましたら教えてください。

2011. 11. 25 紅月

路地の暗闇に人影が五。

しかし、それを五だと判別するには自らがそこに入っていく必要があった。

「私ってそんなに弱そうに見える？」

「ああ。少なくともそこで寝てる三人よりは弱そうだな」

「いつも思っただけこうなる前にどうかしてよ、兄さん」

兄さん。そう言った少女の身長は百四十センチほど。長い金髪をツインテールの形に結び、毛先の方は縦ロールになっている。そして着ているものはゴスロリ服だった。丁寧に王冠の髪飾りも頭に乘せている。

華奢な体も相まってとても強そうに見えなかった。

兄さん。そう呼ばれた方は顔は口元しか見えない。緑のパーカーを着ている。その口元にしてもにやにや笑っているという感じに歪められている。目を覆う前髪をさらにフードを被ることで押さえつけていた。

「俺、機械専門なの。だから人間はお前任せ。You see ユーシー？」

「アイシー、とは言いたくないけれどね」

二人仲良く、この暗いところから出ようとしたとき、出口が封鎖された。出口はそこひとつ。反射的に身構えた妹を制するように、向こうは声をかけてきた。

「相模^{サガミ}ホムラと相模マキナだな」

二人は黙って頷いた。

「二人に来てもらいたいところがある。ついてきてもらおう」



日付は相模兄妹が路地で会話するよりも一日戻る。

地方の名家と言うわけでもない。少女はこの伝統的な日本家屋を嫌いながらも剣を振れる広さの庭を持つことに感謝していた。

朝食の前に木刀を振る。ゆっくりと体を起こしていく。

朝練なので制服に着替えてから朝御飯を食べる。普通の女子よりいささか量が多い気がするが、木刀を振っていた分おなかがすいたのだろう。長い黒髪は流したまま、その食べる姿からは驕の良さがうかがえた。

インターホンの音に玄関へ向かえばそこにいたのはテレビでしか見たことのなかった軍服。

「葵ナナさんですね。黙って我々についてきてもらえますか」
アオイ

柔らかな物腰だが有無を言わせぬ態度。彼女に選択肢はなかった。



新宿都庁。上層から外を見ることができると有名な観光地は自衛隊によって封鎖されていた。

都庁の前には人が集められている。十代後半から二十代前半といったところだ。不安げに、平然と、仲良くなったのか人と楽しげに話していたりと様々だ。

そんな中にホムラとマキナ。ナナの姿もあった。前者二人はその見た目から近づくものがおらず、後者一人は近づくものに対して端から拒絶していた。

待つことしばらく。気の短いものが文句を言い始めた頃、前方に人が現れた。スーツの上から紫のマントを羽織っている。姐さんという雰囲気^{ヒカサ}がしっくりとくる女性だった。

「私は日暈^{ヒカサ}ナツメ。せっかくの休日に突然『ムラクモ』選抜試験に呼び出してしまい、申し訳ない」

ざわっと辺りが騒がしくなる。

『ムラクモ』と言えば存在すら不確かな都市伝説としてしか語られていない対『マモノ』戦闘を専門としている機関だ。

『マモノ』がなにかと問われたら、一般人は恐ろしく凶暴な獣と答えるだろう。間違いではないし概ね正しい。

二〇一五年頃に存在を確認されてから緩やかにではあるが出現回数、確認される種類が増えている。

これを待っていたかのように人類には少しずつではあるが、生身で『マモノ』に対抗できる力を持つ者が現れた。その集団が『ムラクモ』である。

そして目の前の人物、日暈ナツメによればこれからその『ムラクモ』の選抜試験が始まるとのことだった。

「質問は後でまとめて受け付けるので、今は話を聞いてもらいたい」
ざわついていた場がその一言によって静まる。

「毎回試験内容は異なっているが、今回は都庁に閉じ込めたマモノと戦ってもらうことで試験とする。あなたたちの命は守りますが絶対ではない。だから無理に、とは言わない。希望しないならちゃんと家に送ることを約束しよう」

では質問を受け付ける。そう言った後は質問がとんだ。

「死んだときはお金が出るんですか？」

「もちろんそれなりの額は出そう」

「辞退したら将来的に不利なことはあるの？」

「いいや。それはない。辞退した者、不合格者にはムラクモ候補者だったという箔がつく。知られていないところでは意味がないかもしれないが、それを差し引いてもメリットの方が大きいだろう」

ムラクモの人は総じて能力が高い。自身の能力に見合う職であれば、知っている人にとってはムラクモ候補者というのは喉から手が出るほど欲しいものらしい。

質問に一通り答えた後、ナツメはもう一度声をあげた。

「もう一度言う。参加者の命は最大限守る努力をするが絶対の保証はしない。参加するつもりのある者は三十分後に都庁エントランスに集合。事前にパーティを組んでからエントランスに入ること。都庁の廊下などの広さを考慮し最大三人とする。もちろん自信があれ

ば一人でやってくれても構わない」

それが最後の言葉だったようで、それに代わり横にいた男性が話し出した。

「補佐のキリノです。ナツメさんからの説明にありませんでしたが、皆さんにはまず自分のクラスを決めていただきます。今配っている紙に書いてある通りムラクモでは五つのクラスを設けています」

マキナは受け取った紙をホームラと一緒に見た。キリノの言うとおり、紙には五つのクラスが書かれていた。クラスについては丁寧に説明がされていていかにも初心向けという感じだった。

「クラスについてはあくまで目安だと思ってください。自分の戦いのスタイルをわかりやすく相手に伝えるためのものです。パーティを組む時に利用してください。そしてパーティを組んだ後僕のところに来てください。回復薬を渡します。その後、エントランスに行ってください。以上です」

その言葉を皮切りに所々でパーティを組み始める。人数にして二十人ほど。ホームラ、マキナ、ナナと他二人が残った。構図としてはナナをどちらのチームがとるか、といった感じだった。

行動を起こしたのはナナ。迷わず相模兄弟に歩み寄っていった。

「私と組んでくれないかしら」

「喜んで」

答えたのはホームラだ。マキナは何も言わずにナナを見ている。

ナナがこの二人を選んだ理由は、二人が焦りもしなければ怯えもしていないことだった。他の二人はおどおどとナナをうかがっていた。それがナナの気にさわったのだった。

「とうわけだ。いいな、マキナ」

「ええ。兄さんの人間性については考えるところがあるけど、人を見る目は信用してるよ」

マキナの言葉に頬をかきつつも口元の笑いを消さないホームラ。たまたま見えた瞳の色は赤色。ナナに向かって手を差し出した。

「相模ホームラだ。クラスはハッカー。よろしく」

ホムラの後にはマキナも手を出した。

「相模マキナ。クラスはデストロイヤー。ホムラが兄なの」

「私は葵ナナよ。クラスはサムライ。二人のことは名前で呼んでいい？ 名字で呼ぶと二人とも一緒でしょ？」

「構わないよ。俺もナナって呼んでいいかい？」

「もちろんよ」

キリノから薬を受け取ってエントランスへと向かう。

これから彼らの物語が始まる。

エントランスに入っただけに一人ひとつずつ通信機を受け取った。今回の試験は命の危険もあるためすぐに連絡が取れるようにとの措置らしい。

エントランスで待っていたのはガトウという男だった。彼もムラクモ機関の人らしいが軍服姿から自衛隊員のようにも見える。

腕時計を見て、マキナたちを見てマキナたちの後から残っていた二人が駆け込んできたのも確認してから時間になったことを宣言した。

「改めて、俺はガトウ。今回の試験では都庁内での指揮をとる。マモノ連中は二階に押し込んであるから倒して三階まで来ること。それが試験内容となる」

ガトウの横のケージにはうさぎのようなのが二匹いる。大きさ的には犬だ。

「ここに集まってる連中はマモノなんて見たことないだろう。こいつがマモノだ。こいつはラビって呼んでる。ためしに誰か……そうだなそのイロモノ連中やってみろよ」

「だとさ」

指名された三人のうちの一人、ホムラはやれやれと言わんばかりに肩をすくめて見せた。

イロモノと言われたことにナナは不服があるようだが、ゴスロリ、顔の見えないパーカー男にセーラー服という組み合わせなのでそう言われても仕方ないだろう、

指差されたマキナたちは文句を言わずにケージの前に立った。

じゃあ開けるぞと言われて戦った。そこまで強くはなかったがこれ以上はたくさんいるとなるとけして油断できない。

「まあ、こんなもんだ。しっかりやりゃあ問題はないから頑張って三階にこい。何かあれば自衛隊のやつらに声をかけるといい。それ

と……」

と言って階段を上ろうとしていたガトウは階段横に浮いているキユーブを指した。

「そいつはポッドだ。うちの研究班が作ったやつで回復もできる。薬をけちりたいやつはガンガン使ってくれ」

そう言ってガトウは今度こそ上へと向かっていった。

反応は二通り。すぐさま二階へ向かう者。そんな人たちの様子を見る者。

マキナたちは後者だった。一度ラビと戦ったので、戦い方を理解したというのもあるだろう。しばらくゆっくりしようとホームラが言ったのだった。

「しっかしさあ、ビビったよな。軍に声かけられたときは」

「うん。まさか兄さんが捕まる日が来たのかと思ってびっくりしたよ」

「いやー。俺はお前が強すぎるんで捕獲しに来たのかと思ったね」
エントランスでのんびりしつつ、二人はまったりとそんなことを話している。ナナは支給してもらった刀を持ち、型の復習をしている。それとも先ほどの戦闘を利用してのイメージトレーニングだろうか下段技が多めな気もする。

マキナも立ち上がり深呼吸をしてからゆっくりとこぶしを突き出していく。スローモーションな動きだが、こうすることで体の重心バランスなどを意識できるので型をさらうときにはちょうどいいのだそうだ。

「しっかし俺、役ただずだな」

先ほどの戦闘でホームラがしたことはただ敵を殴っただけ。ムラクモの資料によればマモノにハッキングして、行動を縛ることで支援ができるクラスだと書かれていたが……。

「コードがわかんないからアクセスのしようがないな」

プログラム内にある定型句を組み合わせてさらに新しいプログラムを作る。それは注文に合った内容で、たとえば好奇心で世

界最高峰と言われるどこぞのセキュリティを破った時はひたすらトライアンドエラーを繰り返したものである。しかしそれは、あくまで対象の中身がある程度わかってからできたのである。

マモノに、というか生命体にアクセスできるなんて聞いたこともねえよ。というのがホムラの心境だった。

そして、女子二人が型の復習も終え、休憩もしてから二階へ向かう。エントランスには三人以外はもういなかった。

「あれ？ ガトウさん何でいるんですか？」

なぜかかなり前に出発したはずのガトウがいた。

ナナの問いにガトウは苦笑する。

「いやなに、いい忘れたことがあってここで上がってくる連中を待ってただよ」

お前らゆっくりしすぎだろうと言われたが、三人はどこ吹く風とあったようである。

ガトウの用事はハッカーのクラスの人物に対してだった。

「あ、俺だね」

へらへらとした態度のまま挙手してガトウの方に向く。

「ふむ。じゃあ君はマイクロチップシステムにハッキングしたことはあるか？」

「ええ、もちろん」

マイクロチップシステムとはマモノが出現しはじめた頃に作られたものだ。

人の体にマイクロチップを仕込むのだ。

このシステムはマモノに食われた人があるかを知るために導入されたもので、現在は逃走中の犯人を追いつめたりするのにも活躍している。

チップには番号がふられていて、その番号から個人の所在地を特定できてしまう。プライバシーにも関わって来るので使用には何枚もの許可証を必要とする。誰にどの番号か与えられているかということも秘匿され強固なセキュリティを導入することでプライバシー

の保護をしている。

このセキュリティは日々更新され、導入以来一度も情報の漏洩が無いとされている。世界でも五指に入る強固なものではないかと言われている。

「あれ、凄かったな。あんなの突破したの初めてだったわ」

そんなことを事もなげにホムラは言った。そこに自らをアピールしたりする様子はない。そのための努力を知っている妹は沈黙していた。

ナナはそれがどれほどすごいことかわかっていない。

「そうか。じゃあこれをやろう。他のパーティのハッカーにも渡しただものだ。言っておくが他のやつには見せるなよ」

渡された紙を見てホムラはこの日初めて口元の笑いを消した。驚いてガトウを見る。ガトウの方はしてやったという顔をしている。

「もう一度言うけど、漏洩はもちろん、悪用もするなよ」

「もちろん。俺はハッカーだからな。俺がやりたいのは俺の技術を遺憾なく発揮することで犯罪の片棒を担ぐことじゃないからな。あとこれ返すわ。持ってたてなくすの嫌だし覚えたし」

ハッカーとクラッカーは違う。ハッカーは技術を使い問題を解決する人のことを指すのだ。まあ、その問題が多少個人的な興味に向いてしまった場合は……クラッカーとは違わないだろうけど。

ガトウに紙を返すと三人は三階に向けて歩き出した。

何を教えてもらったのか気になったナナが聞いたところ、マイクロチップシステムを使って人の体を強化できるのだそうだ。

ホムラが教えてもらったのは防御力強化で、これのお陰で戦闘の効率がよくなった。

途中でガトウに追い抜かれたり、休憩中のパーティに追いついたり、出発が遅かったことを他のパーティに馬鹿にされたりしながらも三人はとりあえず戦闘経験を積んだ。何回目かにあったパーティによると、武道などで有名な人も呼ばれているらしい。

「で、三階についたのな」

「思ったより簡単だったね」

「ガトウさんが追い抜いていったあとに三階でなにかあったって通信があったのが気になるわ」

肩に着けた通信機をいじりながらナナは言った。

ムラクモの一人らしいナガレという人物からの応援要請だった通信が入ったのは二階にあった大部屋を抜けようとしていたときだった。

「私はこの花の方が気になるけど」

マキナが指したのはコンクリートに生えた花だった。特に害はないものの、青い葉に赤い花は不気味だった。

何より、この花はマモノの出現とほぼ同時に発生した、これまでのマモノ出現時にはなかったという自衛隊員からの情報がマキナは気になったという。

「どっちにしろ行くしかないだろ。ほれ、とりあえず行動するぞ」
ホムラに言われずとも、と二人は進む。その先にいたのはガトウと赤毛の人。おそらく彼がナガレという人だろう。

ガトウは三人に気づくと一階にあったのと同じポッドを指し回復するようにと指示した。

「イロモノ連中か。お前らで最後だ」

ガトウによると、思った以上にきつかったと判断してリタイアした人がいたそうだ。ここまでで、はじめの半分ほどしか残っていない。

「で、最後に来たお前らにはこの先にいるでかぶつを倒してほしい」
「は？ 何で私たちがそんなことしないといけないの？」

ナナの言葉ももっともだったが、ガトウに押しきられてしまった。

「仕方ないって諦めとけよ、ナナ」

「すいません。ガトウさんは言い出すと聞かない人ですから」

二階の大部屋の真上の位置にある部屋に例のでかぶつがいるそう
で、休憩もそこそこに戦闘開始となった。

「てかあれドラゴンじゃね？」

「ええ、そうね」

「西洋の竜だね」

青い鱗。腹部は青が薄くなっていった白色で、巨体。コウモリのような羽というか翼。

「どう見てもドラゴンです本当にありがとうございました」

「そんなこと言っていないで、兄さんはさっさとディフェンスゲインを」

「はいはい」と

二〇二〇年の今では珍しくない仮想現実キーボードとディスプレイが展開される。赤い目はそれを扱う人であることを示す、特殊なコンタクトレンズを介して表示されるそれは場所を取らない。しかし、触れた感触がないため、初心者には扱いにくいものになっている。しかし扱いに慣れれば他の追隨を許さぬスペックを誇る。ホムラのそれは改造されている特注品でまさに彼の相棒とも呼べるものだった。

「とりあえず一回斬ってみるわよ」

「あいよー」

ホムラの緊張感のなさに呆れつつも、ラビ相手に練習していた袈裟斬りをドラゴンにくらわせる。勢いよく跳び、重力も利用した技はドラゴンに十分通用した。

見た目より柔らかそうだと判断したマキナがそこに追撃をかける。ドラゴンはこの狭いところでは動きづららしく鈍い。うまく避けていたが、前足がマキナにヒットして飛ばされる。

「マキナ！」

「私は大丈夫。それよりもあと少しだろうから止めを……」
「任せな」

ホムラのつき出したナイフがドラゴンののどに深く突き刺さりドラゴンに止めをさした。崩れ落ちるドラゴン。

「また兄さんは美味しいところを持っていったね」

「おう」

相変わらず口元を歪ませフードで顔を隠し感情を読ませない。ホムラにお疲れ様とナナが肩を叩いた。

薬を受け取り立ち上がったマキナたち三人をガトウは素直に称賛した。

「俺とナガレはさらに上に向かいながらさっきみたいなやつがいな
いか確認してから行く。お前らはエレベーター使ってとっと屋上
に行け」

「さっきのようなドラゴンは今まで確認されていません。今は勝
てましたが無理して戦わないでくださいね」

二人と別れて三人は十階行きのエレベーターに乗った。屋上行きの
エレベーターはまた別になる。

「しかし、俺すごくね？ ディフェンスゲインまじ強くね？」

「便利よね。おかげで薬の消費も少ないし」

「エレベーター見えてきたよ」

『屋上にこれまでとは違うマモノが現れました。我々では対処しき
れません。応援を！』

その通信が入ったのはそんなときだった。

『聞いてたかイロモノ連中。お前らの方が屋上につくのは早いはず
だ。どうにか持ちこたえてくれ！！』

通信は一方的に切られた。三人に選択肢はなかった。屋上に向か
う以上戦うしかない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8649y/>

竜を狩る物語

2011年12月2日20時45分発行